

斎藤美奈子著 『冠婚葬祭のひみつ』（岩波新書）を松岩寺住職がよむ

おすすめの本ではあるけれど少し（？）もある

かつては書籍の編集者であり、現在は文芸評論家である著者が、これまでに出版されたマナー本を、「形式に流れすぎています。もっといえ、業界のスポークスマンに成り下がってしまったている」（本書・88ページ）と鋭く批評するのが気持ちが良い。さすが岩波新書、切り口が新鮮です。が、「葬式が仏教と結びついた理由とは」（13ページ）の記述は、言い古された観念的なことばづかいで、仏教に身をおくものとしては少し誤りもあるのが残念です。

そこはとばして読んでいただくとして本書中、第3章の2「死の準備はどこまで必要か」と、その3「身近な人の死に際して」は、書きにくいことが端的に書かれていて、葬式坊主が読んでみても、だいたい適切であると思います。なかでも、「葬儀は初動が大切だ」（191ページ）は、坊主として

1

壇家さんに言いたいことが全部かいてある。ならば、そう言えばよいのだけど、不幸があつて寺へ連絡があるときは、すでに悪徳葬儀社の手中にはまっています。悲しみと混乱の真つ只中の遺族に向かって、葬儀社の選択からひっくり返す勇氣は私にはない。

不幸の前に、尋ねられたり相談されたら、「葬儀は初動が大切だ」と同様のことを言っではいるのですが、これは機会がむずかしいのですよ。

というわけで、せめて誰かがこれを目にして『冠婚葬祭のひみつ』（岩波新書）そのものを読まれることを切望して、しがない寺のホームページの片隅に好著の一節をご紹介するわけです。（以下の引用はスキヤナーとOCRソフトで活字化したもので、誤植などがあつたとしたら引用時に発生したものです。原本にはつけられているフリガナは省略しています）

葬儀は初動が大切だ

病院で亡くなった場合、遺体は看護師の手で必要な死後の処置がなされ、清拭（遺体を清めること）をして浴衣などを着せ、病室か霊安室で搬送車の到着を待つことになる。

心当たりの葬儀社があるなら、そこに連絡して遺体を引き取りに来てもらう。心当たりがなければ、病院や警察が出入りの葬儀社を紹介してくれる。ただし、ここが肝心、遺体の搬送を受け持った業者の多くは、そのまま葬儀も担当するつもりでいる（だから彼らは病院や警察に営業活動を行うのである）。病院によっては、いきなり見知らぬ人があらわれて、遺体をストレッチャーで霊

2

安室に運びはじめ、白衣を着ているので病院スタッフかと思っていたら葬儀屋さんだった、などということがあったらしい。

「病院斡旋の葬儀社に搬送を依頼するなら「搬送とドライアイスだけ」と決め、あとはお引き取り願う。「かかりつけの葬儀社」の場合でも、自宅まで搬送してもらったら、いったんお引き取り願ったほうがいいとは、ある葬儀屋さんのアドバイス。大切な人が亡くなった直後は、みな疲れているし、冷静さも欠いている。ここで一息入れて、家族だけでゆっくり話し合う時間をとったほうがいいからだ。

話し合うべきは、喪主を誰にするかと、葬儀の規模と場所、遺影をどれにするか、そしていただいたの予算である。喪主は葬儀だけでなく、その後の法要なども主宰することになる。ふつうは配偶者か子ども(結婚して姓が変わった娘でも問題はない)。故人が「祭祀の主宰者」に指定した人がいるなら、その人。葬儀を斎場で行うなら、自宅の近くか、会葬者が集まりやすい場所かなど。イメージが固まったところで、再び葬儀屋さんにご登場願うことになる。

(斎藤美奈子著『冠婚葬祭のひみつ』191ページ)より

他にもうなずける項目満載の好著で、もっとうご紹介したいけれど、それは信義に反するから、興味をもった方は740円の新書だから、購入して読んでみて!ダダで入手できる情報は危ないのです。さいごに、もうひとつ(?)をあげるならば、本書175ページの「信頼できる葬儀社探しは最低限

の危機管理」で著者は、良い葬儀社探しの方法として、インターネット検索をあげていますが、ネットでは良い業者は見つからないのでは?。どの業者も、親切で安価と良い事ばかりを書くのですから。本当のことが知りたければ、寺の住職に聞くことです。だって、住職は色々な葬儀社の仕事ぶりを見ているのだから。住職の意見には個人の好き嫌いが若干影響されますが、それはお許しを。ネット検索よりは信用できると思う葬式坊主からのアドバイスです。